

奈良市における庭園の悉皆的調査

遺跡整備研究室では、2012年より奈良市の文化財課との連携研究として、奈良市における庭園の悉皆的調査を実施しています。調査の目的は、名勝庭園以外に、奈良市内に残る歴史的な庭園を調査し、その数と現況を把握するとともに、文化財指定・登録等の保護施策のための基礎資料を作成することです。

奈良市に残る庭園の中でも、森籙もりりく(1905-1988)が昭和期に作った庭は特筆に値するでしょう。奈良文化財研究所の発足の1952年より15年勤めた森は、日本庭園史研究の基盤を築いたとして高く評価されていますが、じつは、社寺や民間、公園や宿泊施設等、全国60数件の庭園の作庭家としても活躍していました。

中でも、岩井邸庭園(1970年)は森にとってまったく新しい挑戦でした。それまで唐招提寺や法華寺等、古建築の庭園を設計していましたが、岩井邸では打放しコンクリートの住居に作庭を試みたのです。

門から玄関まで湾曲する石畳の横に、約7tの生駒産の巨石を2つ深く埋め、その周りに室生産の栗石と苔を敷くことによって深山幽邃しんざんゆうすいの雰囲気醸し出しました。家に近づくにつれ、建築にあわせた幾何学的な切り石のデザインへと変わっていきます。いわば、自然と人工の調和を計った構成です。

しかし、庭は生き物であり、管理する職人によって、また施主が世代交代することによって大きく変化したり、消滅したりすることも少なくありません。岩井邸庭園も例外ではなく、90歳を超える現所有者が維持管理してきた思いにどのように寄り添い、森の庭園を残していけるかという問題に直面しつつあります。このように奈良市内に残っている古代の庭のみならず、近現代の庭の現況を把握・記録した上で評価をしていくことも緊急の課題となっています。

(文化遺産部 エマニュエル・マレス)



岩井邸庭園 (2013年撮影)